

論文

明治初頭における岩倉具視の教育思想

関 口 直 佑*

はじめに

第一節 岩倉具視の思想背景

- (一) 岩倉具視の対外意識
- (二) 外来宗教観と水戸学への接近

第二節 岩倉具視の教育顧問

- (一) 教育行政の傍臣
- (二) 長谷川昭道の皇学理念

第三節 岩倉具視の教育理念

- (一) 戊辰以前
- (二) 戊辰以後

おわりに

注

参考文献

はじめに

本稿の目的は、岩倉具視の教育思想の形成過程を明らかにすることである。そのために先ず岩倉の思想背景を概観し、次に岩倉を取り巻く教育ブレーンの存在が、岩倉の思想形成において如何に影響を与えたのかを解明してゆく。

岩倉具視については、我が国の近代史を語る上で欠くことのできない人物であるため、研究者によりこれまでも多くの分析がなされている⁽¹⁾。

しかしながら、それらは政治や外交面での論考が主であり、岩倉の教育に関する研究は、学制以前の京都における学校制度創設をめぐる経緯など、教育制度上における論説に限定されており、岩倉の教育思想に関して十分に踏み込んだ論考がなされているものは少ない。そして、学舎制は近代日本における教育の萌芽であるため、それを構想した岩倉の教育思想に着目することは意義があると思われる。

また、先行研究においては、『岩倉公実記』、もしくは『岩倉具視関係文書』を主としているが、本稿ではこれらの資料に加え、近年マイクロ化された資料を適宜用い、岩倉の教育思想を究明してゆく⁽²⁾。

以下、本稿では次の三節に分けて論証を行う。第一節では、建白書等を用いて、幕末における岩倉の思想的特色を分析する。第二節では、岩倉の教育ブレーンを紹介し、とりわけ長谷川昭道の思想を中心に論じてゆく。第三節では、岩倉の教育意見を用いて、戊辰（1868）前後における変遷を論述してゆく。以上の論証を通じて、岩倉具視の教育思想の推移と特質を考察してゆくこととする。

* 早稲田大学大学院社会科学研究科 博士後期課程5年

第一節 岩倉具視の思想背景

(一) 岩倉具視の対外意識

本項では、岩倉の対外意識に関する分析を行う。ここで教育分野以外の意見書に触れる理由としては、教育に関する提言は政治外交分野とも密接に関連しており、教育意見それ自体で独立したものではなく、他の意見書との相補性を有しているからである。また、岩倉自身が「凡ソ国家ノ政令ハ大小ト無ク、悉ク外夷ノ事ニ関係セサルハナシ」[日本史籍 1983: 149]と語っているように、国内政策と諸外国との関係性を軽視することはできないと考えられるからである。

岩倉の対外意識についての先行研究では、「単純素朴な攘夷論、夷狄観とは類を異にしていた」とされ[安岡 1969: 4]、幕末期については、「国家独立・対峙の側面はより重視し、その道德・文化上の優劣の側面はより軽視している」としている[板垣 1984: 60]。

しかしながら、岩倉の対外意識、特に切迫した外交関係における危機意識に焦点を当てたものは少ないように思われる。そこで、岩倉の教育政策の動機とも言えるこれらの要因について述べてゆきたい。なお、後節では特に、戊辰前後における岩倉の教育思想の変遷を考察するため、以下では幕末期を中心に見てゆくこととする。

欧米諸国による集团的示威行動が顕著になると、世俗社会とは一線を画してした公家社会においてもその動揺は顕著であった。「蠻夷國賊降伏國內一致、平穩之御祈、神職僧侶名譽之一体被相撰被仰付、可然哉ト存候得共、當時名譽ト申候テハ如何可有之哉、右人体之儀ハ差置

何分夷賊追々及強請、既ニ神州之瑕瑾ニモ可相成哉ト只々春來格別被惱宸襟候、御事諸臣一同實ニ不堪恐懼、尚又關東所置モ不尋常治亂之際ト深令心配候」[東京大学 1972: 178]といった心中は、一般はもとより公家社会においても偽らざる感情であったであろう⁽³⁾。

具体的に岩倉の言説をもとに見てゆくと、開港による貿易を「渡來ノ諸品多クハ奇翫弄具ニシテ有益ノ物稀ナリ」とし[日本史籍 1983: 121]、これにより生じた禍災を、以下のように述べている[日本史籍 1983: 239]。

互市以來我之有用ノ物ヲ以、彼之無用ノ品ニ易へ、金銅石材ヨリ絹布穀肉迄日々彼ニ要奪セラレ、彼ヨリ得ル所ハ徒ニカナキンフクリン遠鏡時計等之物ニシテ國力益疲弊、物価益騰踊、萬民困苦生活ヲ不安ヨリ一旦變有ルニ及テ、外夷貨利ヲ散シテ内地之人民ヲ誘誑致候ハ、必彼ニ籠絡可被致、終ニ夷虜ノ術中ニ陥リ可申候

安政の通商条約の締結、そして貿易港の設置は、日本の世界市場への参入といった経済的側面のみで説明が可能なものではなく、岩倉が観取した「開港」とは、欧米諸国による富の篡奪手段として認識されていたのである。実際、「自由貿易」による弊害は、物価上昇を招来し、そして、その結果「萬民困苦」の状況を利用した「誘誑」を阻止することは、岩倉をして我が国の独立という至上命題を抱かしめたと考えられる。

また、岩倉は外国との交際上の心得として、

外國ハ己レノ國ノミヲ利スルヲ以テ主ト

シ、他ノ國ノ不利ニ歸スルハ敢テ顧ミル所ニ非ス、故ニ天下ノ利ヲ共ニシ相互ニ信義ヲ守ルト云フハ口實ニシテ、其深意ハ貪利ノ術ヲ逞フスルニ在ルノミ、決シテ公平無私ノ心ヲ持テ通商ヲ為スモノト思慮ス可カラス

と述べている〔日本史籍 1983: 294〕。

徳川時代を通じて日本に浸透した儒教的倫理規範は、五常を重んじ、五倫の道を全うすることを説いた。それらより醸成された国民性は、幕末から明治にかけて来日した多くの外国人が賛を述べていることから理解できる⁽⁴⁾。そうした社会では、相互の信頼に基づいた人間関係が構築されたわけであるが、しかしながら岩倉は、通商の際においては「公平無私ノ心」を喪失した外国人に対しては、従来の価値観の転換をここでは主張している。本来、聖書を仰ぐキリスト教圏の国々では、「公平無私ノ心」はその徳目として必然的に重視され、実践され得べき価値観であることは想像に難くない。ところが、岩倉の実感としての「外国」は、「信義」は口実であり、「貪利ノ術ヲ逞」くする存在と映ったのである。この時の岩倉からは、欧米諸国の「通商」の表裏を察知し、そうした国々と対等に通商するための、旧来の儒教倫理に拘束されない、諸外国と交際する上での国際感覚を読み取ることができるようと思われる。

さらに、岩倉が種々の提言を行い、政策を押し進めた背景には、内政上の問題だけでなく、歴史的考察に基づく對外意識が明確に働いていた。つまりそれは、当面の内政問題解決のための諸外国からの援助を忌避することにより、その後の我が国に対する干渉を阻止しようとする

ものであった。岩倉は太宗の例を引き、「一タヒ突厥ノ兵ヲ借り、創業ノ力ヲ助ケ幽燕ノ地ヲ以其徳ヲ報セシヨリ、唐世三百餘年ノ間北方ノ關門ヲ失ヒ、終ニ取返ス事モ不相成候、晉ノ石敬瑭ハ契丹ノ兵ヲ借テ後唐ヲ伐チ亡シ其恩ヲ謝センカ為ニ雁門大原ノ如キ要地ヲ割テ北夷ニ與ヘ候」とし、そして現今の状況を「中國ハ英夷ヲ引キ、鎮西ハ墨夷ヲ引キ、北國ハ魯夷ヲ引キ、關東ハ佛夷ヲ引ク」ことを危惧し、「夷虜ノ力ヲ借り内地ヲ功伐」〔日本史籍 1983: 238〕する情勢の危険性を感じていたのである。実際にこうした当時の状況は、外国人の目にも「既成の秩序は崩壊に瀕しており、国中が政治的変革を待ちうけていた。国内における激動の力は、すぐに国外からの影響力と結びついた」〔グリフィス 1995: 56〕と映ったのである。諸外国と提携し、またそれに追従することで解決を試みる勢力が多く見られるなか、「夷虜ノ術中ニ陥」ること憂慮した岩倉は、国内政策全般にわたり、その後も日本が独力で近代国家と成り得る方針を打ち出して行ったのである。盤石な基盤を有していなかった明治政府にとって、欧米諸国からの独立を確保する手段としての国民教育の重要性は、岩倉が意識せざるを得なかった課題の一つであったのであろう。

(二) 外来宗教観と水戸学への接近

明治憲法の制定に参与し、第2伊藤内閣において文部大臣を務めた井上毅は、明治5年にキリスト教に対する所感を「余初メニ、耶蘇教ノ論、深遠ニシテ、人ヲ感スルニ足ルト思ヘリ、其所謂聖書ナルモノヲ讀ミ、耶蘇傳ヲ一閱スルニ及ンテ、始テ其淺近ニシテ、取ルニ足ラサルヲ知ル」と断じたうえで、次のように述べてい

る [井上 1872: 91]。

獨一眞ノ説ハ、人ノ意表ニ出テ、尤モ人心ヲ帰一セシムルニ足ル、然ルニ君長ヲ假尊トシテ、天神ヲ真父トシ、現世ノ政令ヲ外視シテ、冥府ノ賞罰ヲ仰ク、勸化ヲ忠トナシ、教ニ死スルヲ榮トス、灌油自ラ盟ヒ、動モスレハ政府ニ抵抗ス、洋史ノ載スル所、十字軍百年ノ戦、新旧三十年ノ争、皆人ヲ殺ス事幾千萬、其他、羅馬法王ノ専裁、僧門ノ横暴、各國中世ノ大亂、大抵皆教旨ノ禍、其慘酷ナル事、實ニ洪水猛獸ノ比フヘキニアラス

そして井上同様キリスト教に対しては、岩倉具視も敏感であった。岩倉の「外患」に対するための政策は、前項で述べたように「国内一致、内国共和」を主とするものであり、それは、制度上の統一を目指すと同時に、精神的紐帯を強固にするための試みでもあった。そこで問題となるのがやはり「洋教」への処裁である。安政5年における岩倉の意見書には、次のように記載されている [日本史籍 1983: 134]。

邪宗ノ深く恐ルヘキハ天草ノ大亂ヲ以テ知ルヘシ、大坂陣打モラサレノ浪人僅カ五六人ニ不足者、切死丹ノ法ヲ行ヒ、愚民ヲ惑シ、籠城百日ニ及ヘリ、十四頭ノ大小名力ヲ盡シテ攻アグミ、終ニ閣老板倉内膳正討死セリ、大將タル者ハナク士タル者十人ニ不足、餘ハ悉ク是烏合ノ百姓勢スラ尚如斯深ク可恐事ニ存候

本来キリスト教と封建制は相対立するもので

はなく、ヨーロッパではキリスト教を利用して、封建的支配体制が確立された。だがそのためには、封建君主自身がキリスト教に改宗し、神の名において統治する必要がある、八百万の神々を古来より信仰していた日本での布教は困難であった。寛永14年（1637）に発生した島原の乱は、鎮定後も宗門改めによる信徒の探索や、寺請制度の実施により幕政期を通じてその再発防止に努められてきた。そうした禁教策の継続は、言い換えれば一定数の隠れキリシタンの存在を認めることができる同時に、一神教独特の思考方法を抑制し、日本特有の神仏習合意識を根付かせる結果となった。

しかしながら、外国船が近海に姿を見せ始め、条約締結により開国が余儀なくされると、国内の状況は、必然的にキリスト教が拡大する素地が作られていった⁽⁵⁾。慶応元年2月には、竣工したばかりの長崎大浦の天主堂に浦上の隠れキリシタンが訪れ、宣教師プティジャンに信仰告白が行われた。その後は、他の隠れキリシタンも天主堂を訪れるようになり、公然と礼拝が行われるようになった。太政官がこれに関連して諮問した際、岩倉の返書には次のように記されている [岩倉-a]。

耶蘇一見ニ付見込左之通

一耶蘇教者我邦古来第一之嚴禁ニシテ、此ヲ犯ス者ハ重刑ニ處スルハ勿論ニ候、然ルニ懇ニ説諭スルハ御仁恤ノ過ル程之儀ニテ、元ヨリ我民ニシテ我法ヲ破リ我典刑ニ處スルハ何ノ憂ル所アランヤト存候

一外國江関リ候儀者、萬國公法ニ於テ他國ニ往キ他國ノ民ニ教ヲ施スト申筋無之ヨシ、且又交際條約中ニ我民ヲシテ彼ガ教ヲ

奉セシムル儀ハ不致ト有之候、此二箇條之
確拠有之候得共、外國ヘノ應接ハ相調可申
ト存候

右ノ見込ニ付、此度、長崎ヨリ申来候通ニ
テ御裁判可被下存候、若此條理上ヲ以テ處
置致候ニ、彼ヨリ異論申立候得者、縦令戰
端ヲ開候共、

御趣意貫徹候様、不顧成敗利鈍無二念可執
行事ト存候、以上

四月

具視

こうした岩倉の答申に反して、その後は事実上のキリスト教黙認という経緯を経るわけであるが、キリスト教を巡る環境の変化は、「国内一致」を目的とする岩倉にとって、復古政策の障壁であると考えられたであろう。また、その教義は一神教であるが故に我が国の「古昔の良法」[日本史籍 1983: 119]とは相容れず、「皇国独立の規則」を「廃毀」[日本史籍 1983: 120]せしめるものとして感知したと想像できる。

ところで、後期水戸学の理論的指導者である会沢正志斎は、文政八年（1825）の異国船打払令を機に『新論』を執筆し、藩主徳川斉脩に上呈した。この書は幕政批判が含まれていたために公刊が許されなかったが、筆写により広く流布し、尊攘派の志士を中心に影響を与えることとなった。そして、この『新論』におけるキリスト教観は、岩倉のそれと対比する上でも供するに値するであろう[會澤安 1825: 109]。

故に人の國家を傾けんと欲せば、則ち必ず
先づ通商に因りて其の虚實を窺ひ、乗ずべ
きを見れば則ち兵を擧げて之を襲ふ。不可

なれば則ち夷教を唱へ、以て民心を煽惑
す。民心一たび移れば、箠壺して相迎へ、
之を得て禁ずる莫きなり。而して民は胡神
の爲に死を致し、相欣羨して以て榮と爲
す。其の勇は以て闘ふに足り、資産を傾け
て以て胡神に奉ず。其の財は以て兵を行
るに足り、萬國の生靈を欺罔し、以て胡神の
心と爲し、兼愛の言を暇りて以て其の吞噬
を逞しうすれば、其の兵は貪なりと云ふと
雖も、而して以て義兵の名を銜ふに足る。
其の國を併せ地を略する、皆此の術に由ら
ざるは莫きなり

幕府が打払令を発し、会沢が『新論』の執筆を開始した年に生を受けた岩倉は、青年期、もしくは志士たちと交わる中でこの書に接し、その思想に共感を得た可能性は高い。だからこそ、公家出身でありながら、薩長を中心とした志士たちと相通ずることもできたのであろう。したがって、「耶蘇教ノ如キ尤斷然死ヲ以テ拒カスンハアルヘカラス、彼毒一タヒ 皇國ニ傳染セハ國舉テ遂ニ彼ノ奴隸トナルヘシ、宜ク斷然之ヲ拒キ、縦令兵端ヲ開クニ至ルモ亦決シテ一歩ヲ退クヘカラス」[日本史籍 1983: 325]とした主張は、『新論』による思想的背景と現実政治に関する岩倉の考察によって導き出されたものであろう。欧米諸国の軍事的な外圧に屈し、止むを得ず開国に至る結果となった状況ではあったが、「縦令兵端ヲ開クニ至ルモ亦決シテ一歩ヲ退クヘカラス」と言わしめた「耶蘇教」に対する不信感は、維新前後にかけての岩倉の思想に着目する上で、軽視することはできないであろう。ここに岩倉が皇学を重視する素地があったのであり、その上、「祭政一致」政策を

基礎に、新政府を構想していた岩倉にとって、「耶蘇ノ徒ノ類ノ如キ大ニ之ニ異ナリ、独リ幽道ヲ論シテ顕事ヲ軽シ、妄リニ福音ニ馳セテ以テ政体ヲ蔑如ス」〔日本史籍 1983: 342〕の教義は、「共和政治ノ國の類」に適合するのであり、天皇を中心とした国家構想を描いていた岩倉にとっては弊害となると考えていたと思われる。ゆえに、キリスト教への対抗軸として、次章で触れる「五倫」の意味が顕出してくるのであり、それは単に忠孝に基づく支配秩序の確立といった側面ではなく、外来思想に対する形而上の独立心を民心に醸成するものであったのである。

また、次項で触れるように、岩倉の周囲に水戸学に精通して人物が多いのも、一つにはキリスト教に対する共通意識を有しているからだと考えられる。

徳川政権、並びに岩倉を始めとする維新政府の参画者によるキリスト教への警戒心は常に存在していたものの、近代を通じてキリスト教は「受容」され、日本文化に磅礴していった。王政復古による神道の「拡大」は、諸外国との交流が増すにつれて表出した自国のアイデンティティの闡明と、国民としての精神的一体感をもたせることを目的とされた。仮に岩倉を含めた明治政府が、他国の歴史にも見られるような、徹底した宗教弾圧を継続して加えてゆくことを決意したなら、そうした政策も可能であったはずである。しかるに、実質的に維新以前においても「懇ニ説論スル」（前掲早大文書）という方法もとられたのには、日本的寛容さと言うべきものが作用しているのであろう。有史以来、宗教間における軋轢は数多く散見することができるなか、我が国におけるこうした両者の「受容」と「拡大」が同時に進行したところに明治

維新史における文化的特異性があると考えられる。本稿では岩倉の教育思想に焦点をあて、その変遷を論じているが、こうした岩倉のキリスト教観に関しては、いずれ論をあらためて補完してゆきたい。

第二節 岩倉具視の教育顧問

（一）教育行政の傍臣

近代日本の教育制度は、明治4年の文部省の設置、同5年の学制の公布において開始されたと一般には認識されているが、実際には元年当初より様々な形で展開されていた。

それらは新政府の議定副総裁であった岩倉具視の意見書に見られる教育構想が、少なからず反映されており、近代日本における教育制度は岩倉の構想をもってその嚆矢と考えることが適当と思われる。そして、多方面に政務を抱えていた岩倉にとっては、彼の構想を具現化する傍臣の存在が不可欠であり、岩倉が日本の教育構想を委任するに足る人材が選出されたと考えられる。

明治元年2月22日、「今般学校御取立ニ付而者制度規則等取調之儀被仰付候間、銘々申談急速可取計候事」〔教育史 1964: 87〕として、学校制度の調査が参与神祇事務局判事平田鎮胤、内国事務局権判事玉松操と同職矢野玄道に下命される。3名は平田神道派の国学者であると同時に、岩倉とも密接な関係であった。ここでの「学校」とは、京都に設置しようとする京都学校を指しており、復古色の強い要素を有する学校の建設計画である。一方で、同年の11月には東京でも学校取調御用掛が置かれ、神田孝平、森金之丞、箕作麟祥などが任命されているが、

彼等が洋学者であるのと非常に対照的である。

玉松操は慶応3年に門人三上兵部の紹介で蟄居中の岩倉に会い、腹心となり謀議に参加した。玉松は復古に際しても「王政復古ハ務メテ度量ヲ宏クシ規模ヲ大ニセンコトヲ要ス、故ニ官職制度ヲ建定センニハ當ニ神武帝ノ肇基ニ原ツキ實字ノ統一ヲ圖リ、萬機維新ニ從フヲ以テ基準ト爲スヘシ」[多田 1979: 60]と建言し、また玉松はいわゆる「錦の御旗」の制作者としても知られている[伊藤 1927: 31]。

矢野玄道に関しては付言を要しないが、水戸学の影響を受けており、「学制略」にあげられている教科書に水戸学派の著作が数多く選択されていることから推察することができる。また『献芹譚語』を著し、当時の岩倉へ多大な影響を与えている[矢野 1971: 51]。

3名は3月28日に「学舎制」をまとめて総裁局へ提出した。その内容は皇学を中心とし、漢学と洋学をその羽翼とし、従来の孔廟の積弊を廃止し、皇祖天神を学神として祀るというものであった。そして、「学舎制」の具体化されたものが、12月京都に開講された皇学所である。しかしながら、この学神の問題に関しては、漢学派からの猛烈な反対に遭い、両派の対立を深めることとなる。

ところが、政府は玉松らの答申を待たずして、明治元年3月京都に学習院の再興を命じた。これは中沼了三を中心とする漢学の教育機関であり、翌月には大学寮代と改め、翌二年正月に漢学所と改称し開講させた。

当時の状況に関して玉松は、「学習院をも併せ儒者多少とも皇道之大意を心得さすとの御事ニ伺候處、分立仕候而者、彼者彼カ意見を用ひ、我指揮ニ随ひ不申、朋黨出来争論紛起仕候事、

目前ニ御座候」[玉松 1868]と漢学派に対する不信感を述べている。

その後、明治2年の12月には皇・漢学所を合併した大学校が京都に設立されたが、両派の反目は依然として止まず、また政治的中枢が東京へ移行したことなどもあり、翌3年には皇学派の御用掛が相次いで辞表を提出し、京都の大学校は同年に廃止された。

さて、こうした皇漢両派が抗争を続けていた状況下において、岩倉が着目したのが次項で述べる松代藩士長谷川昭道が存在であった。両者の関係は、岩倉が蟄居中の時期に遡る。長谷川は元治元年(1864)藩命により京都で活躍しており、この時に岩倉ら政府中枢の者との関係が深まった。なお、長谷川に関しては大久保利通も、「今朝長谷川深美子來、學校之義ニ付段々議論有之、其外高論承、見誠感状ニ堪ス候、當時無他事人物与目し候」[東京大学 1969: 31]と日記に記しており、評価を与えている。

長谷川に関する先行研究には、近年においては復古期における長谷川の皇道思想を教育の伝統主義的側面において分析したものや[沖田 1983: 36]、戦前においては、維新精神史における皇学派の教育思想として説明したものがある[徳重 1934: 409]。また、皇漢両派の対立が激化した際、長谷川の教育政策は政府側の一時的妥協案としての役割が論じられている[大久保 1987: 84]。

しかしながら、岩倉と長谷川の思想的対比を中心に分析した論考はなく、教育思想に関する長谷川による岩倉への影響を論じたものは確認できない。ゆえに次項以下では、これらのことを中心に、両者の思想的特質を述べてゆくこととする。

(二) 長谷川昭道の皇学理念

長谷川昭道は深美を通称とし、号を戸隠舎とした信濃国松代藩の世臣である。文化12年12月29日に生まれ、佐久間象山と共にこの時期を代表する同藩の先覚である。天保10年、25歳の時に江戸の藩邸に勤仕し、佐藤一斎、平山鋭二に学んだ。これより以前、藩地に居た頃の師は、漢学に藩老鎌原桐山、藩儒竹内錫命、平山流兵学に山寺常山があり、和歌に小野里眞梶があり、特に熊澤蕃山の思想や国学の知識を菅沼正身から鼓吹せられた。

長谷川は嘉永2年に『深憂狂語』を著して藩の学校施設を論じ、日本精神を基調として武士の本文を果たすべき教育を施すべきを力説した。それには水戸学の影響が著しく加わっている。藩老鎌原桐山による水戸の会澤安の『新論』の国譯は天保12年に着手され、弘化2年に完成した。長谷川は弘化3年に自らそれを謄写し、同4年には藤田東湖が蟄居中、眞田幸貫から林鶴梁を通じての尋ねに答えるかたちで、弘道館の施設を詳細に報じている。長谷川の思想はこうした中で醸成されてきたと考えられる。また、弘道館では孔子を祀ったが、長谷川は松代の学校に於いて孔子を祀ることを否定し、そして孔子を以て遊民に似たるものとして、武士の職に在るものは決してその行迹を学ぶべからざることを主張した⁽⁶⁾。

ここで、長谷川の著述を繙いてみたい。前述したように、長谷川の思想形成において水戸学の存在を無視することはできないが、その論考は旧来の儒学、国学とも異なっている。また、対外意識面においても、狂信的な拝外主義的要素は認められず⁽⁷⁾、岩倉同様、現実主義的な視点に立脚しているといえよう。

長谷川の教育に関連する意見書は多く、特に明治元年8月に岩倉に対して提出した官制、称谓、外交、服制、通商、開拓、財政、学政等の長篇の建白書が代表的である。中でも学政に関する部分に関して岩倉は共感を示し、同年8月には皇道皇学に関する長編の意見書を再び上書した。次節で触れることであるが、翌明治2年に進言された岩倉の「時務策」からは長谷川の思想的片鱗が随所に散見できると考えられる。昭道思想の全体像を述べることはここでは避けるが、以下では長谷川の教育思想に関する論考、特に岩倉に影響を与えたと考えられる部分に論点を絞り考察してゆく。

長谷川は文久元年四十七歳の時には『皇道述義』七巻を著し、日本固有の大道について論述した。これは、藤田東湖が提唱した「神皇之道」について研究したものであり、長谷川特有の思想が貫徹されている。そして長谷川は「神皇ノ道ヲ 皇道ト稱シ、其法ヲ 皇法ト稱シ、其學ヲ 皇學ト稱ス。是レ神道、國學、古學ノ流ト、名實ヲ異ニスルユエンニシテ、誠ニ已ムコトヲ得ザルナリ。謹ミテ按ズルニ、皇道ハ彝倫ノミ。皇法ハ彝倫ヲ叙スルユエンニシテ、皇學ハ彝倫ヲ明ニスルユエンナリ」[信濃 1935-a: 599]と述べ、皇道を学ぶ皇学の目的は「彝倫」を明らかにすることであると断じている。

さらに、この「彝倫」については、明治元年に長谷川が岩倉に対して建白された学政に関する建言においても論じられている。そこでは、先ず「学問ノ道ハ、博ク之ヲ學ビ、審ニ之ヲ問ヒ、慎デ之ヲ思ヒ、明ニ之ヲ辨ヘ、篤ク之ヲ行候義、学問ノ準則ニ御座候テ、學問ノ然體ト奉存候。其之ヲ學ビ、其之ヲ行ヒ候所ノ者ハ、即チ人ノ人タル道ヲ學ビ、人ノ人タル道ヲ行ヒ候義ニ有

之、其人ノ人タル道ハ、即チ君臣夫婦父子兄弟長幼朋友ノ六達道ニ御座候テ、其之ヲ行ヒ候所以ノモノハ、仁勇義智禮信ノ六達德ニ御座候」[信濃 1935-b: 169] と述べた上で、皇学の要諦を以下のように書き記している[信濃 1935-b: 187]。

皇道ノ御大道ハ彝倫ニ御座候テ、其御教學ハ彝倫ヲ明ニセサセラル、所以ニ有之候。彼ノ漢土堯舜ノ道モ、亦彝倫ヲ明カニセント欲シテ未ダ盡ス能ハザル者ニテ御座候。右故ニ、其禮儀三百威儀三千ハ、是レ皆彝倫ヲ明カニスル所以ニ御座候テ、其五刑ノ屬三千ハ、是皆彝倫ヲ敗亂スルモノヲ罰スルユエンニ御座候。其他ノ禮樂制度、禁令賞罰、兵制軍律モ、亦皆彝倫ヲ明カニスル所以ニ非ルハ無是、農工商賣ノ業ヨリ、凡百ノ技藝器物ニ至ル迄、亦悉ク彝倫ヲ保有スル所以ニ非ルハ無御座候。西洋諸學モ亦皆彝倫ヲ保有スル所以ニ有之、佛教等ノ如キ、其教師ノ、其身ニ彝倫ヲ廢スル者ト雖モ、其要スル處ハ、天下ノ人ヲシテ彝倫ヲ保全セシメント欲スル老婆心ヨリ出候者ニ御座候テ、天下ノ人ヲシテ彝倫ヲ斷絶セシメント欲スルモノニテハ無御座候。左候得共、大ニ其大本ヲ誤リ候義ニ付、其弊害モ亦淺少ナラザル義ニ御座候。是故ニ、彝倫ヲ保有スル用ニ給セザル者ハ、天下無用ノ物ニ御座候テ、彝倫ヲ傷害致シ候モノハ、是レ悉ク邪惡不正ノ物ニ御座候

長谷川は、このように洋の東西に関わらず「彝倫」の究明が第一の眼目であり、皇学の教授には、「其無用ナルモノヲ排斥セラレ、其邪

惡不正ナル物ヲ拒絶セラレ、大ニ世界ノ衆智ヲ集メサセラル、大ニ世界ノ衆善ヲ取ラセラル、大ニ世界第一ノ學校」を建立することを主張している⁽⁸⁾。

ところで、往々にして「国学（皇学）」と記載され、国学と皇学が同一に扱われる傾向がある。しかしながら、「皇学」という名称に関しては、その定義を次のように述べている[信濃 1935-b: 441]。

皇學ト云フ名目ヲ立タルコトハ、已ムコトヲ得ザルニ出タルモノナリ。世ノ中ニ、學ト云事其品多端ナリ。神道ノ學、國學、和學、古學、心學、儒學、老莊學。是ヲ道教トイフ。佛學、蘭學、洋學、忬云フハ、其大端ナリ。又軍學、兵學、是ハ唱ヘ方ノ違フノミナリ。醫學、經濟學、史學、律學、音學、歌詞ノ學、詩文章ノ學、筆學、算學、其餘技藝百工ノ學、舉ゲテ數フルニ暇アラズトイヘドモ、右ハ其小割ナリ。前ニ云フ學ノ大端モ其品多シトイヘドモ、イヅレモ一國一家一人ノ學ニシテ、天地人ノ大學ニアラズ。故ニ各々其ノ所見ニ因テ説ヲ立テ、教ヲ立ル故ニ、各々異同アリ。且其教學ニ高下大小正邪眞妄清濁淺深甚ダ同ジカラズト雖モ、之ヲ要スルニ、一モ三オノ本體ヲ眞識シ、三オノ大經大法ヲ全備完識スルモノアルコトナシ。故其學教ノ名ヲ用ユルトキハ、三オノ大經大法ヲ全備昭明ニスルニ於テ、大ニ差支トナルコトアリ。故ニ已ムコトヲ得ズ、忌憚ナキノ誹ヲ犯シテ、假リニ皇學ノ名稱ヲ新建スルコトナリ

さらに長谷川の説明によると、「世界ノ衆智

ヲ集メ、世界ノ衆善ヲ取ラセラレ、以テ其全體ヲ御大成セサセラレ、之ヲ 皇學ト稱セラレ候義ハ、猶ホ天下諸藩ノ中、兵學兵技ノ類、其祖宗傳來ノ學流二本ヅキ、廣ク天下諸流ノ善所ヲ取り集メテ、之ヲ合併シ、往々之ヲ家流ト唱へ候義ト、甚ダ相似タルコトニ御座候」[信濃 1935-b: 191] としている。

前掲の「彝倫」の解説においても述べられていたように、ある特定の学問分野に偏頗するのではなく、「彝倫」の価値観に依拠しながら「世界ノ衆智」を集め、「世界ノ衆善」を選択するという長谷川の皇学とは、諸学問を「漢土西洋ノ學ハ共ニ皇道ノ羽翼タル事」[信濃 1935-b: 210] としながら、「神皇ノ大道」を満たす「彝倫」を講究してゆく学問であった⁽⁹⁾。

第三節 岩倉具視の教育理念

(一) 戊辰以前

岩倉による教育改革の提言は、嘉永6年(1853)の米国使節来航を契機とし、鷹司政通に対して上申された提言の中に確認することができる。当時の幕府の対応を「杞憂ニ堪ヘサルモノ有り」と感じた岩倉は、宮中における教育刷新策を次のように述べている[多田 1968: 99]。

此ノ如ク非常ノ事態ニ推移スルカ為メニ、朝廷ニ於テモ和歌蹴鞠両道ノミヲ奨勵シテ已ム可キノ秋ニ非ラサルヲ以テ、人材ヲ教養シテ非常ノ用ニ備フルノ御經畫ハ一日モ猶豫スヘカラスト思考ス、今ノ学習院ハ先朝特殊ノ靚慮ヲ以テ御設置アラレタルモ、規模至テ小ニシテ學則モ充分ニ確立セサル

ニ由リ遺憾ナシトセス、因テ其制度ヲ更革シテ文武贊ト為シ、文タリ武タリ其才能ニ應シテ各自ニ専修セシメ、實用ニ適スルノ人材ヲ陶冶スルヲ以テ眼目ト為スヘシ

外交政策における失態を「国体」に直結すると考えた岩倉は、「勅命ヲ以テ差止メ」る必要性を説き、朝廷が国政に接近するためにも、宮中における教育を「和歌蹴鞠」から「實用ニ適スル人材」を排出する「文武贊」への政策転換を促した。この意見は鷹司により再考を求められたものの、嘉永6年当初から岩倉が教育政策を模索していたことは着目してよいであろう。そしてまた、岩倉が希求した「實用ニ適スル人材」が具体的にどのような人材であったかを、種々の意見書から推察することができるのである。

第一節で論じたように、岩倉は諸外国の示威行為を「外圧」と捉え、現実的手段を講じ、また水戸学の思想に近接する視点から籌画を煉ってきた。それらは「夷虜ノ術中」[日本史籍 1983: 239]に取り込まれないための対策であり、「異常ノ器」[多田 1968: 101]と評される岩倉独自の視点と考えてよいであろう。以下では、具体的な教育政策案を、これまでの思想的推移をもとに分析してゆきたい。

慶応3年3月の「濟時策」では、「五畿ニモ亦一箇ノ觀察使府ヲ置キ和漢洋ノ諸學ヲ研究スル大學校ヲ設ケテ才能ヲ教養セシムルコトヲ兼掌セシムヘシ」、「七道ノ觀察使ニ命シテ管轄内ニ數百箇所ノ小學校ヲ設ケテ幼童ニ五倫ノ道ヲ教諭スルコトヲ努メシム可シ」と教育に関する提言がなされている。これは、先行研究でも取り上げられており、「大学校および小学校を統

括するという岩倉の構想は、国内の教育を一元的に観察使府の行政統制下にくみいれようとするものである。和漢洋の諸学を研究する大学校と五倫之道を教諭する小学校とは、教育の理念において相異なる。(中略)維新後、政府の中枢にあつて政策決定に参画した岩倉はすでに教育に対しても深い関心を示し、教育制度の構想をいっていたのである。」「[井上 1963: 72]といたように教育制度上の草案として論じられている。しかしながら、前後の文脈を併合して考える時、岩倉が「五倫ノ道」をとりあげた事由は「極めて前近代的な、むしろ反近代的な動機」[駒林 1954: 30]から発せられたものとは一概に看取できないことが理解できるであろう[日本史籍 1983: 299]。

海外貿易ハ寛永以來漢土阿蘭陀ニヶ國ノ商船僅ニ一二艘長崎港ニ渡來スル而已ニシテ即チ鎖國ナリシモ、安政以來横濱開講ニテ亞墨利伽歐羅巴諸國ノ商船絶エス往來シ、今又兵庫開講近キニ在ラントス、斯ク形勢一變スルトキハ、吾カ皇國モ亦貿易ノ道ヲ講究セサル可カラス、營利ハ素ヨリ外國習熟スル所ナリ、吾カ皇國ハ今ヨリ之ヲ學ハントスル者ニシテ其巧拙ハ雲壤ノ差アラシ、所謂利ニ喩ルモノハ義ニ疎ク、義ニ喩ルモノハ利ニ疎キノ理ニシテ、豈ニ尋常ノ事ニテ外國ノ右ニ出ツヘケンヤ、故ニ貿易ノ道モ懇切ニ教諭ヲ要スルヲ以テ、商賈ニ於テモ亦従前ノ如ク惟一家ノ利ヲ謀ルノミヲ是レ事トセスシテ、富國ト云フコトニ着眼ス可キ様誘導セサルヲ得ス、然レトモ好奇喜新ハ人生ノ常欲古今ノ通情ニシテ上ノ好ム所ハ下、是ヨリ甚キハナシ、朝廷ニ於

テ富國ノ道ヲ主張セラルトキハ、利在ル所、弊必ス之ニ從フノ理ニシテ、西洋名利ノ學問盛ンニ行ハルト共ニ、衆人前後ノ得失ヲ顧ミス、末流ニ趨リテ本源ヲ忘レ、一時逆上症ニ罹ルカ如ク、脚根空虚トナリ、如何ナル弊害ノ生スルコト有ルヤ測ラレス、是レ亦、遠ク慮ラサル可ラス、因テ七道ノ觀察使ニ命シテ管轄内ニ數百箇所ノ小學校ヲ設ケテ幼童ニ五倫ノ道ヲ教諭スルコトヲ努メシム可シ、幼童ニシテ五倫ノ道ヲ習熟涵養スルトキハ、少壯ニ至リ營利ノ道ニ趨ルモ奪ハスンハ慶カスト云ウカ如キノ甚キニハ至ラサルナリ

このように岩倉が意図した「五倫ノ道」が単なる儒教への憧憬からでも、近代的教育理念における理解の甘さからでもないことが理解できるよう。開国が決定的となり、諸外国との貿易が盛んになると必然的に我が国も「貿易ノ道ヲ講究」しなければならない。けれども、「營利」の追求を振興し、「西洋名利ノ學問」が広く行われはじめると、価値観が変容し、あらたな社会問題が生ずる可能性も否定できない。そこで岩倉は幼少から、「五倫ノ道ヲ教諭」しておけば、その弊害は最小限に抑えることができると考えたのである。

同様に人事を中心とする文部省の基礎を作りあげた江藤新平においても、「夫學ハ道藝ナリ、本文所論ハ道ノ學ナリ、固リ學校ノ設不可忽、但シ藝學ヲ不開サレハ不可ナリ、藝學校ハ方今ノ急務ナリ」[江藤]として、道徳と学芸の両立を推進している。少なくとも岩倉から江藤までの我が国の教育方針は、道徳と新知識の均衡を試みていたと言えるであろう。

なお、「利」と「義」に関する問題は長谷川昭道も論じており、「通商交易ノ義ハ、御國家御利害ノ大ニ關係仕處ノ事ニ御座候得共、偏ニ利害ニ依テ其事ヲ謀ラレ候トキハ、不測ノ御後患モ可有之ト、深ク杞憂ニ不堪奉存候。依之通商交易ノ道、必ズ義ヲ以テ其大本ヲ立サセラレ、利モ亦失ハレズ候様有之度、(中略)先第一義ト仕候處ハ、彼ト義ヲ争ハレ候テ、決シテ利ヲ争ハレズ争様」[信濃 1935-b: 154]と述べている⁽¹⁰⁾。

しかしながら、この時点における岩倉の教育構想は、道徳面の補填を儒教思想に依存しており、王政復古を掲げた新政府の方針とは矛盾するものであった。したがって、岩倉の教育思想面における限界を扶助したのが前節の長谷川昭道であり、長谷川の皇学理念は、岩倉をして維新政府の教育政策に合致せしめるものであると映ったのであろう。そこで、そうした長谷川の啓発を受けた後の岩倉の思想的変容を、次項で明らかにしてゆきたい。

(二) 戊辰以後

五カ条の御誓文が誓盟され維新政府が発足すると、志士官僚からも教育に関する提言が提出された。木戸孝允は「一般人民之智識進捗を期し、文明各國之規則を取捨し、叙々全國に學校を振興し、大に教育を被爲布候儀、則今日之一大急務と奉存候」と述べ学校教育の振興を早急に推進することを建言している。しかし、「忽卒文明各國之形様而已を模擬いたし候は必良圖に有之間敷、却而國家人民之不幸を醸成候も難計と奉存候」として、一方的な西洋文明の模倣を警戒している[日本史籍 1931-b: 78]。この後、明治5年に学制が発布され、洋学中心の教

育体系が作用しはじめると、この懸念は現実のものとなり、「修身學は歐洲之十倍もいたさせ度」と木戸に言わしめる状況となった[日本史籍 1931-a: 65]。

また、大久保利通は、岩倉への書翰の中で「是非今日之神州たる處を以、教化之道を開き、萬民眼目を新にするに従ひ、漸を以闡奥に導き候様御仕向ヶ無之候而ハ何もむた事に成行可申候」と述べた上で、人材養成の手段として「草々に前條之舉擧運被爲在度候」[日本史籍 1927-a: 494]と留学制度の進捗を説いている⁽¹¹⁾。

さて、前節で紹介した長谷川昭道との関係が深まり、長谷川から長文の建白書が提出された以後の岩倉の意見書として注目すべきものは、明治2年6月に朝議へ上奏されたものである。この全7条からなる上書の中で岩倉は「人材登用ノ道ヲ明カニシテ以テ選舉ノ方ヲ嚴ニスルコトヲ圖ル」こと、また、海外貿易が浸透し、珍奇な貨物が輸入したことにより庶民生活が奢侈に傾き、「商賣逐利ノ風ニ浸染シ、其弊や廉恥なるもの殆ンド地ヲ拂ハントス」ることなどを述べ、第一節で紹介した岩倉の意見書と同内容の提言を行っている[多田 1979: 759]。

そして、長谷川の思想が最も反映されていると考えられるものが、最後の7条目に記された「欲明皇道興正學」と題された以下の提言である[多田 1979: 760]。

彝倫ノ道ハ神代以降上下貴賤ノ別ナク、躬行實踐シ天下一日モ之ヲ廢セス、然ルニ學者ナルモノ私見ヲ立異説ヲ唱へ、動モスレハ天下ノ蒼生ヲ誤ラントス、宜ク全國大小學校ヲ設ケ、彝倫ノ道ヲ講明スルヲ以テ根

礎ト爲スヘシ、此根礎確立スルトキハ國家ノ正氣充實シテ外邪隙ニ乗スルコト能ハス、果シテ然ルトキハ海外萬國ト和ヲ講シ、戰ヲ宣フルノ時ニ方リ上下人心一致シ、之ト和スヘキ時ハ之ト和スルモ、後患ヲ遣サス之ト戰フヘキ時ハ之ト戰フモ後害ヲ防クニ難カラス、若シ此根礎ヲ確立セサレハ國家ノ正氣充實セスシテ患害ヲ起スモノ特ニ外國ノミニアラス、恐クハ近ク蕭牆ノ内ニ在ラン、是故ニ當今ノ急務ハ内ヲ治ムルニ在リ、内ヲ治ムルノ主要ハ彝倫ノ道ヲ明カニスルニ在リ、彝倫ノ道ヲ明カニシテ凡百ノ學問技藝皆始テ興ルベシ、所謂本立テ道生スル者ナリ、廟堂ノ上ニ立ツモノ宜ク皇道ヲ明カニシ正學ヲ興スコトヲ圖ルヘシ

前節で解説したように、この意見書からは長谷川の思想を看取することができるであろう。「全國大小學校ヲ設ケ」という部分は、前項で紹介した慶応3年の意見書でも確認できるが、「彝倫ノ道ヲ講明スルヲ以テ根礎ト爲スヘシ」とあるように、「彝倫の道」を最重要視する教育理念は明らかに長谷川昭道の思想と軌を一にしている⁽¹²⁾。また、前節で見たように長谷川は「神皇之道」（皇道）を研究しており、ここで岩倉が主張している「欲明皇道興正學」の「正學」とは明らかに長谷川の「皇学」を指していると思われる。そして、「當今ノ急務ハ内ヲ治ムルニ在リ、内ヲ治ムルノ主要ハ彝倫ノ道ヲ明カニスルニ在リ」とは、第一節で紹介した「国内一致、内国共和」を目的とした岩倉の思想と、長谷川の皇学理念が結合した言辞であると考えられる。

さて、この意見書に関して井上氏は、「岩倉は大学規則・中小学規則を契機として「彝倫ノ道」の講明から「人智ノ開進」へ、すなわち、道德主義から知識主義への転位をしている」とし、「転位をうながしたものは、志士官僚の開明政策の確立のなかにもとめなければならない。」としている〔井上 1963: 76〕。はたして、この岩倉の「転位」を、志士官僚による洋学中心の開明政策のみに求めてよいだろうか。たしかに、木戸や大久保は同時期に洋学を重視した意見を表明しており、政府の主軸は知識主義が大勢であったであろう〔日本史籍 1931-b: 79, 日本史籍 1927-b: 11〕。

しかしながら、岩倉がそれに妥協したことによる「知識主義への転位」と結論づけることには、疑問が残る。何故なら、明治2年6月以前にも岩倉は各国から新知識を学ぶ必要性を説いており、その理由も明確に述べているからである〔日本史籍 1983: 286〕。

近來蠻夷ニ於テモ皇國漢土ノ言語文字ヲ傳習シ、皇國漢土ノ書籍ヲ繙キ古今ノ治亂虛實ヲ研究スト聞ク、誠ニ恐ル可キノ至ナラスヤ、苟モ其恐ル可キコト有ルヲ知ラハ、我モ亦韃靼、蒙古、朝鮮、印度、英吉、佛蘭、孛漏生、魯西亞、阿蘭陀、阿墨利加等諸國ノ文字言語ヲ熟習シテ、彼カ書籍ヲ研究シ、天文、地理曆數、陸兵海軍醫術、其他各種ノ學問ニ就キ、彼カ長ヲ資リ、我カ短ヲ補フテ、即チ我カ恃ム所ノ待ツ有ルノ備ヲ充實ナラシメンコトヲ切望シテ已マサルナリ

この慶応2年11月に呈された「航海策」で

は、志士官僚の洋学振興とは異なった動機による「知識」が目指されている。岩倉にとっての「人智開進」とは、「蠻夷」が対象とした地域の「研究」をしていることに対して、日本も彼国を学び、「備ヲ充実」しなければならないという主張がこめられていた。ここでは所謂「彼を知り己を知れば百戦して殆うからず」といった言意であり、こうした岩倉の教育提言は、「恐ル可キ」諸外国の「外圧」に端を発していると言ってよいであろう。

もっとも、明治4年文部卿大木喬任は、「南校改革議」の中で、生徒は「篤志勤行才學以テ期可成者其選ニあて、以テ初テ我南校之生徒ト」することを伝え、「其才ニ乏シク而シテ篤志之徒」[大木]の入学には否定的であった。

この後、明治10年代に入り、自由民権運動が高まりを見せ始めると「現今全国ノ風俗民情、日ニ益浮薄軽佻ニ趨リ、五倫ノ道將ニ地ニ墜ントス」[日本史籍 1983: 490]と感じた岩倉は、「道德心」や「忠孝ノ道」の涵養をあらためて意識することになる。また、「在官非役ヲ不論、士族人望アル者人撰云々ノ事」[岩倉-b]とし、その「知識」よりも「人望」に重きを置く姿勢は貫かれていたと言ってよいであろう。

維新政府発足以前から、形而下のみならず形而上における「外圧」を意識していた岩倉にとっての「彝倫ノ道」とは、単なる封建遺制の余韻といった類のものではなく、想定されうる社会不安の抑制であると同時に、「外圧」に対する我が国の精神的「防壁」としての意味合いが込められていたのである。

おわりに

本項では、明治初頭における岩倉具視の教育思想とその変遷を論じてきた。それらを要約すると以下のように整理できる。

岩倉が政治に関与し始めた当初は、西洋諸国との貿易、またキリスト教の浸透に警戒感を示しつつも、「實用ニ適スル人材」を登用し、「貿易ノ道ヲ講究」する必要性を認めていた。しかしながら、「西洋名利ノ學問」が人心に与える影響を懸念し、幼少から「五倫ノ道」を教授することで対処しようとした。

さらに、岩倉の思想的背景には水戸学の影響があると考えられ、彼の意見書をはじめ、水戸学に影響を受けた教育ブレーンが配置されていることから、その感化作用は少なくないと思われる。

そして、そうした人材の中でも長谷川昭道の実存が大きく、戊辰以前においては、道德を重視しつつも、前時代的な「五倫ノ道ヲ教諭」という発想から脱却することはできなかったのに対し、戊辰以後に至っては、皇学を中心とし、「彝倫」を基盤とする教育思想に変化したことは着目してよいであろう。岩倉の教育思想は、長谷川を迎え入れたことにより、従来の構想と結びつき、一定の結実を見ることとなったと考えられる。

岩倉具視の言説に接する際、彼自身の国家観や水戸学の影響を色濃く残した着想、またキリスト教への疑懼など、我々が一見して受容しがたいような思想に接することがある。しかしながら、それらを単に政治的意図や排他的なナショナリズムの萌芽として総括するのではなく、そうした「非近代的」部分にもあらためて

着目することで、維新期の底流に存在した思想的葛藤を多角的に考察してゆく契機になるように思われる。

また、儒教的色彩を含む道徳による秩序の安定という発想は、それ自体「保守性」の表明として扱われる傾向があるものの、そうした着想を一概にしてしまうのではなく、個々の言辞に込められた思想を丹念に分析してゆく姿勢も必要であろう。岩倉による一連の對外警戒意識は、排外主義的攘夷思想や、復古主義的国体観など、単にそうした「前近代的」価値観のみで語ることでできない岩倉独自の識慮を感じ取ることができると考える。

岩倉具視関係の資料に関しては近年、書翰を中心とするものが新たに発見されており⁽¹³⁾、今後はそうした資料も活用しながら、研究を補足してゆきたい。

[投稿受理日2012.8.24／掲載決定日2013.1.24]

注

- (1) 岩倉具視の関係資料に関しては、大久保利謙「岩倉具視関係文獻略目録」(同『岩倉具視』中公新書243p)に詳しい。また、最近では大塚桂『明治国家と岩倉具視』信山社13pにも挙げられている。
- (2) 北泉社による国立公文書館内閣文庫所蔵、国立国会図書館所蔵憲政資料室所蔵、岩倉旧蹟保存会对岳文庫所蔵の岩倉関係文書の各マイクロ資料を指す。
- (3) これは、「強請」を使役する側においてもそうした意図が少なからず内在しており、例えば次のようなものであった。「背景に強圧という手段があったにせよ。そして、他のすべての手段をもってしても条約の規定を忠実に履行させることができないなら、強圧的な手段に訴える意志があり、そうすることもできるということも知らせなければならぬ。あつれきや戦争という不慮の事故の起こる可能性を意味している。しかし、そのような外交手段を断固として、しかも慎重に用い

るなら、実際に力に訴えたり、その他のなにか公然たる強制的行動に訴えることを避けよう見こみは、事情の許すかぎりもっとも、大きいことであろう。」(オールコック『大君の都 下』岩波文庫291p)。

- (4) 『逝きし世の面影』には、そうした外国人の貴重な証言がまとめられている。(渡辺京二2007『逝きし世の面影』平凡社)
- (5) 当時のキリスト教をめぐる状況については、『明治天皇紀 一』吉川弘文館499pを参照。
- (6) 長谷川昭道の来歴に関しては、飯島忠夫1935「長谷川昭道とその學說」『長谷川昭道全集 上』7-58pを参考にした。
- (7) 例えば「攘夷」思想に関しては、飯島忠夫1935『長谷川昭道全集 上』457p欄外を参照。
- (8) なお「彝倫」については、『書経』にも既に述べられており、横井小楠、矢野玄道等も言及している。しかしながら長谷川ほど「彝倫」を主軸とした論考は述べられておらず、学校教育における「彝倫」の必要性等を述べるに止まっている。(東京大学出版会1977『横井小楠関係資料一』4-5p、矢野玄道「猷芹詹語」1927『伝記』第4巻第5号30p)なお、長谷川は諸学問を統合する概念としても「彝倫」という用語を用いているが、この言葉を特に選択した理由に関しては今後の課題としたい。
- (9) 沖田氏によれば、長谷川の皇学は「在来の思想を包摂するばかりでなく、西洋に対して主体的に接近し、それを包摂しようものと考えられた。この際、包摂する対象が量的、質的に拡大されればされる程、『皇学』に付与されたナショナルな特質はそれだけ希薄になるのであった。(中略)そして、昭道の皇学にみられるように、包摂と弁別の二重の機能を有した受容の方法こそ、異質な価値体系を持った外来文化との対立を回避して、いわば文化の現象を受容して、それを従来の価値体系の中に溶解するという、異文化受容の典型を作りあげたものに他ならなかった。」としている(沖田行司2007『新訂版日本近代教育の思想史研究—国際化の思想系譜—』学術出版会90p)。沖田氏の議論は注目すべきものであるが、筆者は「包摂と弁別」といった機能のみでなく、長谷川独自の国体観に基づく見解が他に存在すると考えている。これについては稿をあらためて論じたい。
- (10) こうした両者が憂慮した「營利」と「道徳」の

関係については、長谷川だけでなく（『長谷川昭道全集 上』535p）、後の明治の知識人たちも思慮をめぐらす問題であった。例えば、徳富蘇峰は「既ニ富ヲ以テ尊神トナス時ニ於テハ、社会ヲ支配シ得ルモノハ唯一黄金在ルノミ、此ノ如キ社会ニ於テハ、権理モナク、義務モナク、善悪モナク、正邪モナク、真偽モナク、親疎モナク、縦令此等ノモノ存在スルモ、唯黄金ノ為ニ抑束セラレ、空シク其ノ奴隷トナルニ過ギズ」（『明治文学全集34 徳富蘇峰集』142p）と述べ、「偏知主義」に傾く社会に対して、その矯正力を働かせるための精神的処方箋となりうべきものを考察している。

- (11) なお、こうした洋学教育については、岩倉が具定、具経の二人の息子に対して、明治2年に両者へ宛てた書翰において、「洋学深酔」を苦慮している様子が述べられている（『岩倉具視関係文書二』227p）。
- (12) 長谷川は明治2年よりかなり前から彝倫についてのべている。飯島忠夫1935『長谷川昭道全集 上』250p, 252p, 463p, 540p, 596p, 599p等。
- (13) 岩倉具視の新発見史料に関しては、今城詰禧「岩倉具視宛ての書翰群、一七〇〇通以上発見！」『歴史読本』2010年7月号参照。

参考文献

- 會澤安1825『新論・迪彝篇』岩波文庫
- 信濃教育会1935-a『長谷川昭道全集 上』信濃毎日新聞社
- 信濃教育会1935-b『長谷川昭道全集 下』信濃毎日新聞社
- 伊藤武雄1927『復古の碩師 玉松操』
- 岩倉具視a（1868）「太政官諮問切支丹宗徒処分問題ニ関スル答申書並関係文書」早稲田大学中央図書館所蔵
- 岩倉具視b「明治十年岩倉家所蔵書類」国立国会図書館憲政資料室所蔵『岩倉具視関係文書』（277-7）
- 板垣哲夫1984「維新後における岩倉具視の対外意識」『日本歴史』430号
- 井上毅「儒教ヲ存ス」1872『井上毅傳史料篇補遺第二』
- 井上久雄1963『学制論考』
- 江藤新平「明治2年岩倉家蔵書類」国立国会図書館憲政資料室所蔵『岩倉具視関係文書』（268-5）
- 大木喬任「南校改革議」国立国会図書館憲政資料室「大木文書書類之部」

大久保利謙1987『明治維新と教育』

沖田行司1983「王政復古期の教育と伝統主義－長谷川昭道の皇学を中心として－」同志社大学人文学会『人文學』139号

教育史編纂会1964『明治以降教育制度発達史 第一巻』玉松操1868「玉松書東」岩倉公旧蹟保存会対岳文庫所蔵

駒林邦男1954「明治5年『学制』以前における国民教育の構想」『岩手大学学芸学部研究年報』7巻

多田好問編1968『岩倉公実記 上』原書房

多田好問編1979『岩倉公実記 中』原書房

東京大学出版会1969『大久保利通日記二』

東京大学出版会1972『三條實萬手録一』

徳重浅吉1934『維新精神史研究』立命館出版部

日本史籍協会1983『岩倉具視関係文書一』

日本史籍協会1931-a『木戸孝允文書七』

日本史籍協会1931-b『木戸孝允文書八』

日本史籍協会1927-a『大久保利通文書二』

日本史籍協会1927-b『大久保利通文書三』

安岡昭男1969「岩倉具視の外交政略」『法政史学』21号

矢野太郎1971『矢野玄道』

E.W.グリフィス（1995）『ミカド』岩波文庫